卒業論文

教師からみた生徒間関係の構築過程

2018 年入学

文学部　社会学・地域福祉社会学

1LT18032R　関川誠人

2022 年 1 月

要約

小中高の学校の生徒たちは学級という集団のなかで授業やそのほかの学校生活を過ごす。学級での生徒間の関係については、「島宇宙」などと表現される友人グループを形成している（宮台 2006）ことや、「スクールカースト」と呼ばれるコミュニケーション能力や容姿などを基準とした序列意識（森口 2007）が指摘されてきた。また、近年の若者の人間関係の特徴として、互いに過剰なまでに配慮しあい、軋轢を表面化させないようにする「優しい関係」の傾向（土井 2008）も報告されている。

これらの研究では、学級の生徒間関係の現状を明らかにしてきた。しかしいじめの観点から論じられたものが多く、生徒間関係の状況がどのように形成されていくのかという過程に注目してきたものは少ない。そこで、主に学級における生徒間関係の形成過程に注目し、上記のような現状が発生するまでの学級の状態を順序だてて分析する。これを通して、これまで指摘されてきた知見について再検討するとともに、その発生過程を明らかにする。

調査は高等学校 2 校の教師計 3 名を対象として、聞き取り調査を行う。調査対象は、これまでに複数回学級担任を務めたことのある教師とし、特定の一つの学級についてのみではなく、複数の学級について考え合わせることができるようにした。また、教師の学級運営の必要という視点から生徒間関係をとらえ、学級の生徒間関係に対する教師のかかわりも同時に分析した。

聞き取り調査の結果高等学校の学級においては、一年生の学級における生徒間関係の構築過程を 3 段階に整理することができた。第一段階は高等学校入学後、中学校での関係性が強く表れる時期、第二段階は部活や行事などの影響によって学級内外に新たな関係性が形成され、友人グループが安定し固定化していく時期、第三段階は新たな関係性が現れにくくなり、長期欠席生徒が出現し始める時期である。

第一段階でははじめ、生徒間の関係性は不安定な状態である。生徒は個人間の関係性だけでなく、学級内の「位置関係」や「ポジション」を徐々に定めていく。「位置関係」や「ポジション」は、学級内において各生徒に与えられている行動を制限するものになる。これらが定まっていく時期では、生徒の中には、「高校デビュー」など、自らの「ポジション」について中学校からの変化をつけようとするなどの動きがみられる。第二段階では、各生徒の「ポジション」がある程度定まり、「高校デビュー」などの動きも少なくなる。その後の第三段階では、「一年生の山場」が来ると表現され、長期欠席などが増え、学校

をやめたいという生徒が現れる。

教師は学校生活の各場面で生徒の友人関係や性格などを把握して、学級運営に用いている。また、生徒間で意識される特定の生徒や友人グループに立場を偏らせず、「中立」であることを意識して指示、指導を行っている。また、生徒間関係にはできる限り介入しない。教師として生徒の「上位」に立ち上から高圧的に指示を出す方法は用いられない。より生徒に近い立場をとって、教師自らの観察や対話によって得た情報をもとに、生徒を「誘導・交渉」するような方法で学級運営が行われている。しかし近年では、生徒が関係を構築する場が教師からは見えにくいインターネット上などに拡大する動きがみられており、今後教師が得られる生徒間関係の情報はより少なくなる可能性がある。またこのことは、学級内で起こる第一段階、第二段階の進行を早めることも考えられる。

「生きる力」を育てる教育目標として、授業に対話形式などを取り込む動きや、いじめを察知するアンケート、スクールカウンセラーの設置など、生徒間関係を保護する動きは盛んになってきている。教師が生徒に近い立場をとり、高圧的な方法で学級運営をしなくなったこともその一つである。また、教師が「中立」的な立場をとる背景には、「優しい関係」などの若者の関係形成上の特性が影響している。学級運営には生徒の学校生活について変化を促すことが求められることが多くあり、行動の変化には動機が必要である。教師から言葉で指示されることは行動を変化させる動機になりにくく、生徒の「位置関係」を把握し、「中立」的立場から生徒間関係の動機を経由して指導を行っている。教師が生徒間関係に依存した学級運営を行う限りにおいて、生徒間関係に直接介入して生徒らからの協力を得られなくなることは致命的であり、特定の生徒の問題解決のために関係性を変化させることは難しい現状がある。

現状多くの高等学校が採用している学級の制度では、生徒にとってクラス内の生徒間関係の構築を失敗することのリスクが大きい。集団生活や関係構築能力を育成する場としては、学級で関係形成に失敗することのリスクを低減することが望ましい。そのために、学級という枠組みにとらわれない生徒集団の設計や、高等学校の生徒の集団生活の在り方を多様化させることなどが求められている。

目次

1.　生徒間関係の現状　1

1．1　クラスの中の関係　1

1．2　クラスの中の序列の意識　2

2.　生徒間関係に関する先行研究　7

3.　若者の人間関係と学校教育　11

3．1　「優しい関係」でつながるクラス　11

3．2　教師の目線で見た「スクールカースト」　14

3．3　生徒間関係の構築過程　18

3．4　教師―生徒の関係と学級運営　19

4.　生徒間関係形成の三段階　19

6．1　調査概要　19

6．2　学級運営初期の生徒間関係形成過程　20

6．3　教師から見た生徒間「位置関係」形成の３段階　21

6．4　第一段階：関係の構築と「ポジション」をめぐる競争　23

6．5　第二段階：「ポジション」と友人関係グループの固定　26

6．6　第三段階：長期欠席生徒の出現と「一年生の山場」　28

5.　教師による生徒間関係の把握　29

5．1　教師が生徒間関係を把握する手段　29

5．2　担任教師の「ポジション」と学級運営　32

5．3　「指揮・監督」から「誘導・交渉」へ　34

5．4　みえにくい生徒間関係の現状　36

6.　考察　39

6．1　生徒間関係の調整装置　39

6．2　教師はなぜ「中立」的でならなくなったのか　40

6．3　感覚的なコミュニケーションの強調　41
6．4　「生徒間関係からの逃避＝教育からの脱落」の現状　42
6．5　学級を失敗できる場に　43

図表　45
参考文献　47